

## 〔モノローグ & ダイアローグ〕

### イギリスからのモノローグ

ロンドン、ペルメル街に、ヒマワリならぬ水仙の花々が咲いていた三月、ワイルドの季節でもあるまいが、BBC放送は二度も彼の劇を放映した。イギリス滞在中、これで観るのが三度目。イギリス人がもっとも好きな“The Importance of Being Earnest”と、二種類のフィルムのある“The Trial of Oscar Wilde”。今回は Peter Finch 扮するやせたワイルドであった。

今年の Easter は 4 月 22 日 (日)。その前の二週間ほど、ほとんど毎晩のようにキリストの生涯が上映されていた。King of Kings や Jesus in Nazareth そしてイタリア版 Christ in St. Matthews。洗礼者ヨハネの断罪の場面には、サロメが登場せざるを得ない。三人のサロメを観ることになった。クレオパトラのような半裸に宝石をさげたサロメ、薄い七色のヴェールの踊りでベリーダンスを見せるサロメ。聖書では母ヘロディアスに操られる大人しい王女の筈であったのに、これらのサロメは聖者に恋をし、自分の意志でヨハネの首を所望していた。前世紀末にワイルドは聖書を模倣して禁に触れたのに、今世紀末、聖書はワイルドを模倣していたようである。(Kei)

### 日本の舞台からのモノローグ

『サロメ』と『オスカリアーナ』を「ひとり芝居」にして、9月2日、3日と新宿の紀伊国屋ホールで上演いたします。『サロメ』は日夏耿之介の訳で井村君江先生の監修によるもので、『オスカリアーナ』は荒井良雄先生が『真面目が肝心』を中心に、ワーキング夫人の口からワイルドの警句を語らせる一人芝居向き的一幕です。

私とサロメの出逢いは昭和50年に、日経ホールで「ひとり芝居」にした『ハムレット』と『サロメ』を2本立てで演じたときです。サロメを演じたい憧れが前からあったのです。夢中で踊り演じた舞台でしたのに、色々問題があったようです。あとで荒井先生より井村先生を御紹介いただき、サロメについてお話す機会に恵まれました。井村先生のお宅で世界各国で蒐集されたサロメの資料を前にしてのお話し合いです。次の舞台への夢が、再び大きく広がるのを感じました。

井村先生と荒井先生に依る「ワイルドの旅」に御一緒させていただき愛好家の方々とフランス、イギリスをめぐる背景を実際に見ることが出来ましたのもとてもよい勉強でした。「安希さん あれがワイルドのサロメの色よ」「ワイルドの生家の彫刻見ておきなさい」井村先生のアイルランドでの折々の言葉を、わたしはスポンジのように吸収しました。緑の

じゅうたんのようなシャムロックの原、紫のヒースの丘、古代僧院の残るグレンダロック、そしてエプスタインのスフィンクスの彫刻がはばたくフランスの墓地ーワイルドが身近になるのを覚えました。

「メディア」「雪女」「モリーの独白」と新しい冒険を重ね、再び4年後の今年の秋、私は3度目の「サロメ」に挑戦いたします。余分なものをみなはぶいてしまい、象徴的な劇にしたいと構想をねっています。どんなサロメがひとり舞台を演じますか。どうぞお楽しみに観にいらして下さり、御意見をいただきたいと願っております。(五十田安希)

### 結婚式からのモノローグ

先日都内のホテルニュー・オータニに教え子のT子さんの結婚式に招かれ、主賓として挨拶ということにあいなった。むろん前途有望な好青年との晴れ舞台、ここでは小生、状況を察して気のきいたはなむけの言葉と意気込んだ。そのため一抹の不安とある種の緊張感を覚えた。それでも型通り、花嫁がいかに良家のお嬢さんで、見目うるわしく情ありでしかも才女かを学生生活のエピソードを交えて話し始めた。見合結婚ということに耳にしていたので、そこはそれで「恋は盲目と言いますが、恋愛結婚は純粋です。しかし見合結婚は聡明であります。」とスマートにこなした。

ところがどうしたことが「結婚は相互の…」というところで少々間があいてしまった。どうも私の脳裏に浮んだことと、口から出た言葉は別のしるもろというところに原因があった。余り間があくと「間抜け」になるので、そこは「えー、結婚は相互の…エー相互の信頼関係が大切でありまして、花婿の若い実業家も今一番仕事にのっており、マー、マコトに良縁であります。」となんとなく歯の浮くような本音が後退し、建前が前進する調子になっていった。実は私の脳裏に浮んだことは「結婚は相互の誤解の上に成り立つ。男性は生活に疲れた時に、女性は好奇心から結婚する。両者とも絶望する。」と言うワイルドのワイルド的な御言葉であった。なるほど真相をついているが、結婚式の宴でのスピーチには相応しくないと歯止めをかけたので歯切れが悪くなった次第である。

だが、今思えばワーグナーの例の結婚行進曲が私のスピーチの微妙な調子を狂わす序曲になっていたように思えてならない。「ローエン格林」第三幕第一場で、聖杯の騎士ローエン格林と大公の娘エルザの結婚を言寿ぐ行列が合唱する。これはめでたい曲で問題はない。しかし問題は、その後エルザが禁断の間を発したためローエン格林はエルザを捨て、エルザは悲しみのあまり息絶える、という結末にある。離別と死を暗示する結婚行進曲がなぜ人気があるのか? 「真相は矛盾の中にある」と言えばよいが、小生のスピーチの進行を混乱させた原因でもあった。ただ花束贈呈の時流した花嫁の涙は美しいものであった。(五味田幸夫)